

煽れメロス

アッシュウィンダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メロスは爆走した。

必ず、かの憤怒の友から逃げ切らねばならぬと決意した。

メロスにはわけがわからぬ。メロスは、村の商人である。

あまり仕事はできないが、

―悪戯に対しては、人一倍に積極的であった―

目次

煽れメロス

1

煽れメロス

メロスは爆走した。必ず、かの憤怒の友から逃げ切らねばならぬと決意した。メロスにはわけがわからぬ。メロスは、村の商人である。あまり仕事はできないが、悪戯に對しては、人一倍に積極的であつた。

ある朝メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此このシラクスの市にやつて来ていた。

メロスには父も、母も無い。女房も無い。二十の、強気な姉と二人暮しだ。この姉は、或る町の律気な青年を、近々、花婿として迎える事になつていた。

結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳や祝宴の御馳走、余興の小道具など沢山の買出しのために、はるばる市にやつて来る羽目になつたのだ。

とりあえず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があつた。セリヌンティウスである。

今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。

歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既

に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。

路で逢った若い衆をつかまえて、何かあつたのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、と質問した。

若い衆は、首を振つて答えなかつた。しばらく歩いて老爺に逢い、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。老爺は答えなかつた。メロスは両手で老爺のからだをゆすぶつて質問を重ねた。老爺は、あたりをはばかりる低声で、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜだ。」

「曰く悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「なんだと。王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしている者には、人質ひとりずつ差

し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きょうは、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。

「あきれた王だ。話をつけてくる。」

メロスは、単純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそ王城にはいつて行つた。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなつてしまった。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであつたか。言え！」

暴君ディオニスには静かに、けれども威厳を以もつて問いつめた。その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたように深く、どこか白いゴリラを彷彿とさせた。

その短剣は単なる玩具のそれであつたが、メロスはこの王を無性に煽りたくなつた。

「市を暴君の手から救うのだ。」

とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか？」

王は、憫笑した。

「仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独はわからぬ。」

「はっ、ぬかせ」

メロスは、つぶやいた。

「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。キサマは、民の忠誠をさえ疑っておるのだから？」

「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりだ。信じては、ならぬ。」

暴君は落着いて呟つぶやき、はたと溜息をついた。

「わしだって、本当は平和を望んでいるのだ。」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」

メロスはさらに嘲笑した。

「罪なき人々を殺し、積み重ねた死体の上で享受するといひさ。」

「だまれ、下賤の者。」

王は、さつと顔を挙げて報いた。

「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、磔になってから、泣いて詫わびたって聞かぬぞ。」

「ああ、王よ。どうやらあなたは私が思った以上にお伶俐《りこう》さんらしいな。ああ、

残念だ。私は、ちゃんと死ぬる覚悟でここに居るといふのに。命乞いなど決してしない。ただ、——」

と言いかけて、メロスは足もとに視線を落とし瞬時ためらい、

「ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限をもらおうか。たった一人の姉に、明後日の結婚式の買い物をたのまれていてね。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つてくると誓おう。」

「ばかな。」

と暴君は、嗔しわがれた声で低く笑った。

「とんでもない嘘を言いよる。逃がした小鳥が帰つて来るといふのか。」

「約束は守ろう。」

メロスは言つた。

「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。姉が、私の帰りを……いや、この荷物を待つてゐるのだ。そんなに私を信じられないならば、よかろう、この市にセリヌンティウスという石工がいる。私の無二の友人だ。やつを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰つて来なかつたら、あの友人

を殺すといい。」

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そつと北叟笑ほくそえんだ。生意気なことを言うやつめ。どうせ帰つて来ないにきまつている。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいう奴輩やつばらにうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰つて来い。ただし、少しでもおくれたらその身代りを殺す。ちよつとおくれて来るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろう。」

「ありがたき」

「はは。いのちが大事だったら、おかれて来い。おまえの心は、わかっているぞ。」

メロスはこの愚かな王にあきれていた。煽る気も失せていた。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、二人の友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスはあきれ気味に首肯うなずき、メロスの肩をぼんとたたいた。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天

の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、翌あくる日の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事をはじめていた。メロスの二十の姉も、きょうは弟の代りに店番をしていた。よろめいて歩いて来る弟の、疲労困憊こんぱいの姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく弟を問いただした。

「なんでも無い。」

メロスは答えなかった。

「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければいけないんだ。確か明日が結婚式だったよね。はいこれ頼まれた物。」

姉はいろいろ言いたそうではあったがあきらめているようだった。

「どうよこれ。綺麗な衣裳だろ。さあ、これから行つて、村の人たちと準備をしなければ。結婚式は、あすだからね。」

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰つて神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。

そうして、姉のことを幸せにしてくれ、と頼んだ。

婿は驚き、夜中にどうした、こちらは明日の仕度していたからよかったが、訳を教えてくれないか、と答えた。

メロスは、訳はない、ただ言うタイミングを逃したくなかったのだ、と更に押しつてたのんだ。

婿は困惑していた。とはいえ明日は結婚式。夜明けまで議論をつづけるも不毛だと、どうにか婿をなだめ、すかして、泊まり込んだ。

結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。

祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも忪こらえ、陽気に歌をうたい、手を拍うった。

メロスも、満面に喜色を湛たたえ、しばらくは、王とのあの約束を忘れるほどに楽しんだ。祝宴は、夜に入っていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願ったが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。とはいえ、友を売ってしまったている。早くいかねば、雨が小降り

になつてくれるとありがたいのだが。本当は少しでも永くこの家に愚図愚図とどまっていたかった。メロスのような男だからこそ、やはり未練というものが在る。

今宵呆然、歡喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「おめでとう。俺はのみすぎってしまったから、ちよつとトイレにいつてくる。あなたの弟になれて嬉しかったよ。」と言つた。

花嫁は、夢見心地で首を傾げていたが、微笑んでメロスの頭をなでた。メロスは、それから花嫁の肩をたたいて、

「姉をよろしく」

と言つた。

花嫁は首をひねつてはいたものの、てれているようだった。メロスは笑つて村人たちにも会釈えしやくして、宴席から立ち去り、トイレに行くふりをして静かに玄關から出て行つた。

薄明の頃、村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃。メロスは、間に合うだろうか、いや、まだまだ大丈夫、約束の刻限までには十分時間がある。きようは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑つて磔の台に上つてやる。メロスは、最後にはどんなふざけあいをしようかと考えながら悠々と歩いてゐた。雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。いくつかのネタは出来

た。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。さらば、ふるさと。いつのまにか雨も止やみ、日は高く昇って、そろそろ暑くなつて来た。メロスは額ひたいの汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。姉たちは、きつと幸せになるだろう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんな急に必要も無い。ゆつくり歩こう、と持ちまえの呑気のんきさを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。そろそろ残り3里に到達した頃、降って湧わいた災難、メロスの足は、はたと、とまつた。見よ、前方の川を。きのうの豪雨で山の水源地は氾濫し、とうとうと下流に集り、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵に橋桁はしげたを跳ね飛ばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟は残らず浪に浚さらわれて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようになっている。

メロスは川岸で困り果て、こうつぶやいた。

「ああ、勘弁してくれよー」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。浪は浪を呑み、捲き、煽おり立て、そうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他に無い。もういいや、どうせ濡れてるし。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめつぼう獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思つたか、ついに憐愍を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胸震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切つて、ほつとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何の用だ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放してもらおうか。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私には残念ながらいのちの他には何も無い。他をあたるんだな。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「ははあ、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたな。煽りすぎたか。」

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒こんぼうを振り挙げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、

「仕方ない」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙すきに、さつさ

と走って峠を下っていった。一気に峠を駆け降り市まできたが、流石に疲労し、折から

午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照って来て、メロスは幾度となく眩暈を感じ、こ

れではならぬ、と思いセリヌンティウスの方にいき、家主がいなことをいいことに飲

み物をとり服を着替えた。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなけれ

ばならぬ。おまえは、稀代きたいの不信の人間、まさしく王の思う壺つぼだぞ、と自分

を叱ってみるのだが、全身萎なえて、もはや芋虫いもむしほどにも前進かなわぬ。とり

あえずセリヌンティウスのベッドにごろりと寝ころがった。身体疲労すれば、精神も共

にやられる。少し休みたかった。約束を破る心は、みじんも無かった。人は煽るが私は

不信の徒では無い。私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸

な男だ。私は、きつと笑われる。姉の一家も笑われる。私は友を欺あざむいた。セリヌ

ンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも俺を信じた。俺は君を、沢山煽った。私

たちは、本当に佳い友と友であったのだ。いちどだって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に

宿したことは無かった。いまだって、君は私を無心に待っているだろう。ああ、待つて

いるだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思え

ば、たまらない。友と友の間の信実は、この世で一ばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、みじんも無かつた。信じてくれ！私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて来たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給うな。放つて置いてくれ。どうしても、いいのだ。私は眠いのだ。だらしが無い。笑つてくれ。王は私に、ちよつとおくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになっている。私は、おかれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事も無く私を放免するだろう。

——私は四肢を投げ出して、意識を手放した。

5分ほどで目が覚めた。

日没まであと4刻ほどとなつたころ、処刑場の外壁の上から顔を出し、セリヌンティウスの様子を見ていた。彼は私を信じて待つてくれているようだ。最後の掛け合いは

決めた。あとはしばらく最後に食べたいものでも食べ飲みたいものものもう。セリヌンティウスのお金で。どうせ死ぬのだ。少しくらいよかろう。

死力を尽して、メロスは走っていた。ぎりぎりに走りこむ演出にリアリティを出すためだ。メロスは疾風の如く刑場に突入した。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た。」

と大声で刑場の群衆にむかって叫んだ。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられていた。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を掻きわけ、掻きわけ、目薬をさし

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいます！」
と、精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧かじりついた。群衆は、どよめいた。あつぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」

メロスは眼に涙を浮べて言った。

「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、君の家で一番高い酒を飲んだ。財布の中身も使った。4刻も前から君を見て爆笑していた。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯うなずき、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑ほほえみ、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、君を信じていた。微塵の疑いもなく信じていた。君が私を殴ってくれなければ、良心が傷んで私は君をこれ以上殴れない。」

メロスは足に唸うなりをつけてセリヌンティウスの股間を全力で蹴り飛ばした。

「ありがたい、友よ。」

片方は呪詛を込めて吐き捨てるように、片方は誰にも聞こえないほど小さな声でさびしげにつぶやいた。

それから、互いにサバおりをかけたが、人々にはひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いたようにしか見えなかった。

群衆の中からは、歎歎の音が聞えた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言った。「おまえらの望みは叶かなくなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

どっと群衆の間に、歓声が起った。

『万歳、王様万歳。』

空気を讀んだ二人は人々にここにこえがおを向けていたが、やがてメロスは走り出した。